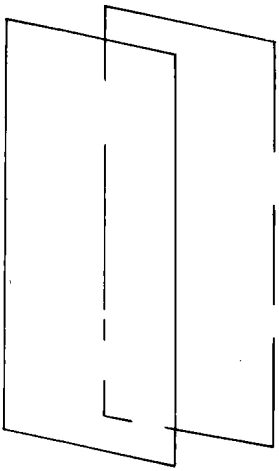
中野美代子

カニバリズム（人肉嗜食）論



中野美代子（なかの・みよこ）
一九三三年札幌市に生まれる。北海道大学文学部中国文学科卒。現在、北海道大学文学部助教授。中国文学専攻。著書に『砂漠に埋もれた文字――パスパ文字のはなし』（塙新書）『北方論――北緯四十度圏の思想』（新時代社）『中国人の思考様式――小説の世界から』（講談社現代新書）『海燕（かいえん）』（長篇小説）（潮出版社）がある。

カニバリズム（人肉嗜食）論
中野美代子著

初版印刷――昭和五十年一月十五日
初版発行――昭和五十年一月二十五日

発行者――島津　矩久
発行所――株式会社　潮出版社
東京都新宿区南元町一四―一　郵便番号一六〇
電話・東京（三五七）七一一一（代）振替・東京　六一〇九〇
印　刷――公和印刷株式会社
© Miyoko Nakano Printed in Japan 1975

乱丁・落丁本はお取りかえいたします

序

澁澤龍彥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

最近、私は動物学者コンラート・ローレンツの名著『攻撃—悪の自然誌』を興味ぶかく読んだ。ローレンツはフロイトのように、科学によるペシミスティックな現実認識から出発する思想家である。私はとくに、ローレンツによって提示された「攻撃性のない愛はない」という命題に、目のさめるような思いをするとともに、以前から自分の予感していた動物性と人間性とに関する一つのパラドックスを、この本によって、あらためて確認させられたと思った。

そのパラドックスとは、説明すれば次のごときものである。すなわち、世間一般の観念では、動物的本能といえば残虐性への傾向をもっぱら意味し、人間性といえば友愛や連帯をあらわすものとされているが、この関係はむしろ逆なのではないか、ということである。

私の大好きなニーチェの箴言に、「口の利けるある動物が言った、《人間性とは、少なくともわれわれ動物が陥っていない一つの先入見である》」というのがあるけれども、まさに私たちは、ヒューマニズムという一つの空虚な先入見に陥っているのではあるまいか、と感じさせられたのである。

ローレンツが、みずから創始した比較行動学の立場から、脊椎動物における「攻撃本能」と呼ばれるものを観察研究した結果によると、同一種族間に行われる攻撃は、それ自体としては決して「悪」ではなく、種を維持する働きをもっている。しかも攻撃本能は、進化の過程で儀式化され、真の殺し合いから切り離されて、無害なものにさえなっているのだ。たとえばチンパンジー

を例にとってみても、彼らは決して一撃で仲間を打ち殺す能力をもってはいない。同類同士の殺し合いは、道具の発明とともに可能となったのだ。最初の武器の発明によって、それまで保たれていた殺戮能力と殺戮抑制とのあいだの均衡が破れ、攻撃を無害なものにする「動物的本能」が役に立たなくなり、ここに危険な「人間性」、すなわち「悪」の芽が胚胎したのである。同類殺害は、別して人間的な現象なのである。

最初の道具の発明とともに、人間はただちに自分の兄弟を打ち殺して、その肉を炙って食うことをおぼえた。シナントロプス・ペキネンシスの骨には焼かれた形跡があり、多くの人類学者の意見では、偶発的なものか宗教的なものかは不明ながら、彼らが人肉嗜食の習慣をもっていたことは確かであろうとされている。

人肉嗜食！――おそらく、その最初は宗教的な要請によるものであろう。ジョルジュ・バタイユは、人間の肉を食った古代人も、この食うという行為が禁止の対象であることを知らないわけではなかったはずだ、と書いている。彼らは禁止を知りつつ、この禁止を宗教的に犯したのだった。「聖なる人肉嗜食は、欲望を創り出す禁止の基本的な例である。」（バタイユ）――いずれにせよ、それが動物的な世界から脱け出した、とりわけ人間的な世界の出来事であることに変りはなかろう。

「攻撃性を含まぬ愛はない」という命題によって、ローレンツはサディズムの根拠を動物学的に説明したが、むろん、それはあくまで脊椎動物の範囲においてであった。一方、性交中に雄を食

う雌カマキリの行動から、性欲と栄養摂取の本能とのあいだの密接な関係を、古今東西の民俗学的事実の豊富な引例によって、哲学的・社会学的に跡づけようとしたのはロジェ・カイヨワである。『神話と人間』の第二部がそれに当る。

たぶん、人間におけるサディズムも、原生動物からカマキリまでにいたる、この原始的な動物の性的カニバリズムの隔世遺伝と見てよいのかもしれない。そもそも、攻撃性の最も原始的な形態は、そのままカニバリズムなのである。ルネ・アランディ博士の説によれば、「あらゆる攻撃性の根源に消化の本能があることは疑いない」のである。

中野美代子さんのエッセイについては、かつて私は図書新聞に連載された「カニバリズム論」を読んで、その飽くなき絶巓への肉薄ぶりに瞠目したことがあり、このたび、その「カニバリズム論」をも含めた最初の文学的エッセイ集が上梓されるに当り、ささやかな餞（はなむけ）を贈ることになった次第なのである。中国文学を専門とする中野さんは、しかし日本の大方の中国文学畑の退屈な学者たちとはまるで違った、いわば血の匂いのする、形而上学的エロティシズムとでもいうべきものを求めている人らしく見受けられる。人肉嗜食やマゾヒズムや残酷などの追求も、そうした志向の一環であることは明らかであろう。

私は、中野さんが中国文学という巨大な地図のなかに、しきりに「テラ・インコグニタ」を求めて焦慮しているらしいのを知って、ひどく嬉しくなった。彼女の夢想のなかのアムネ・マチンはついに幻であるかもしれず、探偵小説と登山の遊戯性を知らない中国文化は、いまや、未知の

土地をすべて既知に変貌せしめてしまうかもしれない。しかし私たちの期待しているのは、ひとりのロマンティストが、虚構の「テラ・インコグニタ」を設定して、そこで観念の遊戯にふけるのを見るということであろう。

韃靼海峡を渡って行く蝶のように、彼女の夢想がアジア大陸を自在に飛びまわり、未知なる花の花粉とともに、ふたたび日本に帰りつくことを望まずにはいられない。

一九七二年九月

カニバリズム（人肉嗜食）論／目次

序　澁澤龍彦　1

I

迷宮としての人間——革命・悪・エロス　13

カニバリズム（人肉嗜食）論——その文学的系譜　27

中国人における血の観念　74

II

魔術における中国——仏陀とユートピア　97

中国残酷物語——マゾヒズムの文化史　123

虚構と遊戯——中国人の性格について　160

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

III

王国維とその死について――一つの三島由紀夫論のために　191
恐怖の本質――アンドレーエフ『血笑記』と魯迅『狂人日記』　218
創作　樹人煉獄――民国六年魯迅の手記　237
創作　長城眩暈――民国十四年魯迅の手記　254
創作　阿Q殮葬――民国十七年魯迅の手記　267
あとがき　281
初出一覧　286

装幀　栃折久美子

I

迷宮としての人間

——革命・悪・エロス

一

魯迅が一九一八年に書いた短篇『狂人日記』は、人が人の肉を食うこと、すなわちカニバリズムを主題としている。ふつう、この小説は、儒教モラルの仮装をまとい人民を食いものにした旧中国の権力体制を、痛烈に批判したものであると理解される。或いは、「すべての民衆をふくめて成り立っている〔喫人(チーレン)(食人)〕の世界」、いいかえれば、「こうしたすべての中国人をこの関係に巻きこんでしまう、なにものかを、魯迅は問題にしたのである」(丸山昇『魯迅』)とも理解される。これらの理解は、正しいであろう。しかし、私は、これらの理解にはとうてい満足できない。そこで、近ごろ、『カニバリズム(人肉嗜食(ししょく))論——その文学的系譜』(別稿)を書いた。本稿は、

そのいわば続篇である。

人が人の肉を食うことに身の毛もよだつ嫌悪を感じ、これを悪と断じることは、ほぼ正常な思考である。また、昼の世界を堂々とまかりとおるいわゆる「良識」である。だが、この正常な、昼の世界である「良識」には、時あってとんでもない罠が仕掛けられているのだ。罠に気づかずに嵌まりこんであがくよりも、われわれは、「良識」をまずもって疑っておいたほうがよろしい。悪を悪であると断じて、やすやすと司直の手に渡すよりは、悪と親しくなっておいたほうがよろしい。それゆえに、私は、ジョナサン・スウィフトの『貧家の子女がその両親並びに祖国にとっての重荷となることを防止し、且社会に対して有用ならしめんとする方法についての私案』(以下『私案』と略記)(一七二九年)と、サド侯爵の『アリイヌとヴァルクウルあるいは哲学小説』第二巻(以下邦訳名に従い『食人国旅行記』と記す)(一七九五年)のほうに、いわゆる正常な思考よりも、はるかに強く感応することを告白する。

スウィフトの『私案』によれば、丸一歳の赤ん坊の肉ははなはだ美味なものであるから、貧困家庭ではこれを国中の貴族や富豪に売りつけるべきである。すると、「友人を招待するなら赤ん坊一人で二品の料理ができる。家族だけなら、頭の方でも脚の方でも四半分で相当の料理ができる。少量の胡椒、塩で味をつけ、殺してから四日目に茹でるとちょうどよい、特に冬分はそうである。」(岩波文庫『奴婢訓』所収、深町弘三訳による)

また、サド侯爵は、ビュテュア国に漂着して住みついたポルトガル人をして次のように言わし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com